

第二十五號

文明之母第二十五號目次

丁數

本誌は毎月二回三日十八日ヨ發行す

本誌は前金ヨ非されば發送せず

本誌の定價は一册金六錢十二册半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢

全國無遞送料

本誌の廣告料は「五號活字二十三字詰」當り左の如し

	(壹回)	(二回以上)
壹行	金八錢	金七錢
三十行以上	金七錢	金六錢
六十行以上	金六錢	金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれば呈す

本誌代金御回送の節は內國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度

郵券代用は一割增

本誌の前金將ヨ相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

版權所有

主筆 大矢森之助

發行兼編輯人 東京深川區諸町十三番地 中村一

印刷人 東京深川區仲町八番地 小西石造

發行所 東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地 生文社

袈裟御前



文明之母第二十五號



明治二十三年五月十八日發兌

○結婚論

中川重麗譯

女子の事を論ぜんとて筆を執るに當ッては、必ず一たび相觸れざるを得ざる一點あり、之を避けんと欲するも避くべからず、常に女子生活の焼點を成せり、即ち夫婦の事是れなり。然るに輓近高尚自から任じ、文明自から誇る才女子が之に戰を宣ぜるは奇も亦甚しき現象と謂ふべし。然れども彼等の斯く反對するにも拘らず、到頭此の關係を絕つ能はざると多しとす。世の男子も亦自由主義の着眼よりして、風俗の此に達したるは、文明人民の文明人民たる所以なりと賞讃し、夫婦は決して風俗の强迫命令するものにあらずとし、國家も道德も夫婦なくして成立し得るが如く說道し、獨り得々として正當の議論なりと信ずれども、若し此の主義にして一般に行はれたらんには、今の女子

社會には如何に不利なるや、蓋し甚だ憂ふべく實に是れ女子を擧げて左遷するものなり、女子の爵位を褫ふものなり。請ふ少しく其の非を說かん。蓋し女子の品位と高等の文明とは唯家族と其の根據なる夫婦よりして發達するものなり。ジヤンパオル曰く女子は狹小なる地を要し、平民の形を要し其の花梗は清潔なる純白なる花を有して、畦の不潔の中に匍匐せざらんことを要す。男子は世界の平民たり、腕に一物を有し得ざれば胸を地球に壓して大地を抱かんとす、然れども彼は空しく墓田一丘の土を抱くに過ぎず。之に反して女子は世界の女丈夫なり、女偉人なり、傍觀者となり無一物にて世界を横行し得べく何事をも爲さずして主座の徘優たるを得べしと。是れ一大眞理なり。縱し人世の狀態は漸く進化し、女子の社會一般に對する位置は多く變化したりと雖も、又其の結果として今の女子に關する問題は嘗て世人の普く知らざりし所なりと雖も、又吾人は敢て女子の幸福は單に夫婦れ中にありとのみ云はざれども、然れども女子は人の妻となるより更に他に十分に美なる花を生ぜざることを服膺せざるべからず。若し社會に夫婦の組織なかりしならば、女性は幾仭の深谷に沈淪したるや知る可からず。

現今家族生活の狀況を見るに、尚は多く女子に附與せられし天然の領分に於ける最

上自由の發達を箝束せり、女子は箝束せられつゝあり。然れども壓制にはあらず、彼は妻たり婢にあらず、妾等は更に之より他を知らざるなり、又他に想ひ至らざるなり。女子が男子と同等に自由に併立することを得るは、唯夫婦の形に於てのみ然るを得べく、從ッて夫婦は自己の勉強と、固有の能力と、職業の伎倆とにより、不羈獨立の位置を開き得る女子の爲に準備したるの地なりと謂ふべし。

妾は今謂へり、女子は唯人の妻となりて始めて男子と同等に、十分の自由を得て併立するを得べしと。然れども此の事尚は今日に多く然るを得ざる所以は、主として古來の習慣に歸せざるを得ず。夫れ古來夫婦の天惠の爲に數多の教訓ありて、皆當時に正當とし、眞理としたるものなれども、其の後種々の新元素を混淆したるか爲め、彼の教訓は多く眞理ならず、正當ならざるものとなり、此の元素は遂に社會の組織を一變し、數百年を經過する間に種々の反對と、種々の壓制を生じ、女子は獨り此の壓制の下に屈せられ、文明の進歩と背馳するに至りたり。是に於て近世夫婦の間に存在する惡弊を除かんと大聲疾呼する人も少なからず。獨逸に於ても亦此の弊害少なからざるより、公平なる觀察者は深く風俗の尊嚴ならんことを希望し、野蠻獸族の風習が尙は夫婦の間に遺物となりて、多く存せることを歎息せり。

三

妾は今ヒッペル氏の書より此の事を聞くことを得べし、氏は實に半世紀前に斯く記したり、曰く「女子も男子と同じく人類なれば彼等は同一の權利あり、是を以て兩種の人類を同一に獨立せしめん爲に之が首唱を欠く可からず。彼等最善人の母、此の母は、總て世の大と稱し貴と稱するものを産み、之を鞫養したるものなり、然るに彼等は常に無禮を以て恩に報はれ、彼等は恰も拐帶人の手に落ちしもの丶如くに待遇せられ、終身奴隸の業を課せられ、善主人に賣らる丶も惡主人に賣らる丶も、之を幸福とするより他は幸福なきものなり。人類の第三の階級は永久に搖籃の中に在り、彼等は小兒の如く常に玩具を弄し、徒に菓子を喰ふて幼稚と一般に遇せられ、彼等は實は粘土たるに過ぎず、之を揑造する人に向って、汝は何と爲すやと問ふことを得ず、さても憫むべき生涯ならずや。僧侶は說いて曰く、我等同胞兄弟姉妹は死とは皆天の父の許に集るの謂ひなりと。然れども到る處に其の同胞たるの實を見ざるなり」。ヒッペル氏は斯く云へり、此の言少しく過酷なるが如しと雖も、所謂女子の解脱、自由の觀念は古來の問題にて、既に當時に此の論あり。男子の中に活潑なる女權の辨護者ありて、理想的公平的の要求に一致を表したるを知るべし。是れ眞に事實なり、妾等は寧ろ之を不可思議なる事實と謂はん。何となれば女子の天運をして多福ならしめんと率先したる先鬪者は、今も

昔も多く男子の中に在りて女子は却て其の數の少きこと是れなり。惟ふに女子は久しく昏睡の境界に在りて、知らず識らず無神經の習慣を因襲し、我が不幸も不幸とせず、是れ女子の天運なりと甘ぜしの故ならん。稀れには此の習慣の爲め苦痛を天に訴へしものもあらん。然れども社會の大勢此の如し、復如何ともすべからざりしなり。是を以て今や諸文明國に議論の花を開ける、美なる價ある問題は、一は羅馬より遺傳せる塵芥より、一は中古より遺傳せる塵芥より斯の女性を發掘するに在りて、女性の自然人類的の權利は久しく此の塵芥の下に埋着し、此の塵芥は實に夫婦と家族とを、往々現世に於けるの地獄となしたり。

又我は忘れざるなり、既に數多の男子が勤儉と知らざる女子の爲めに、多くの苦痛を受けたることあるを。然れども此の害は他の貞女賢母の受けたる苦痛を以て、十倍の賠償を得たるを知る。貞女賢母が法律の保護なきより財産を奪はれ手段を害せられ、自己を思ふ貴重なる本願も又小兒を思ふ慈悲ある本願も、滿足せしむるを得ず、爲めに支柱となりて目前に我家の零落するを救ひ得ず、落涙千行の悲式演劇は唯舞臺の上に觀るのみならず、我等が家の一隅にも俳優出で女子の短かき生活中にも數齣を演ぜしことありしなり。

是を以て世の女子は皆瑣事小件を念頭に置かず、公平なる正義なる感覺を以て、女子の事に力を盡くす人々を尊敬せよ、女子をして法律の全恵を受けしめ、女子をして奴隷の羈絆と兒戯の境界を脱せしめよ。今尚ほ此れ境界にあるもの少しとせず。此れ等のことに鋭意する人々を尊敬せよ吾輩は女子が法律に對して男子と同等ならんことを望むなり。之れを望むと同時に、妾輩はまた女子が法律に對する責任を望まざる可からず。然る後始めて女子は男子と同等に併立するを得ん、國家の一女民となりて自ら任ずることを得ん。吾輩は信ず、茲に女子の氣質養成に最も大切なる一事あることを、即ち我が行爲の萬事に就いて自から責任を負ふことと是れなり。是れひとり妻たる人のみならず廣く一般の處女に於てもまた然るなり。此の感覺あるときは彼の魔界に踏迷ふことなかるべし、魔界とは何ぞ、唯二權利あるを知りて一つも義務あるを知らざることと是れなり。

（未完）

蜂の裔かと思はるゝ、女ばかりは瑕瑾なし、そを娶りなば幸多し、家富みさかえ花かをり、財いやまし實を結び、愛する夫に愛されつゝ、偕に老ゆく其中に、美しく又譽れある、子も出で孫も生るらん、天女にまさる嬋娟は、己が四邊に充ち亘り、凡女の前に煌々と、照り輝きて見ゆるめり、かゝる女の喜びは、卑しき戀の噂のみ、口善惡なくも語り合ふ、團集の中に一たびも、坐を共にせぬことぞかし、ツオイスの神が眞丈夫に、配せたまふ女子のいと賢くて善きものへ、皆斯くあれよあれかしよ。

ジモニデス氏



○物思ふ事ありけり春　佐々木信綱

すがの根の、ながき春日を、いたづらに、物れもひくらす、きのふけふかな。

さま〴〵よ、れもひみだれて、おと柳の、いと長き日と、くらしつるかな。

つく〴〵と、ものれもひをれば、わが門の、やなぎのうれよ、はる風ぞ吹く。

○近詠五首　松下貫議

柳靡風　吹く風の、こゝろも見ゑて、青柳の、なびくすがたの、いひしらぬ哉。

山吹　けふもまた、をやみなくふる、春雨よ、濡れて色そふ、やまぶきの花。

春曙　有明の、月もかをりて、ほの〴〵と、はなに明けゆく、遠のやまの端。

菫　袖たれて、心のどけく、をさな子の、道の行てに、つむすみれかな。

藤花　池の面よ、なびくふぢ波、風さへも、わかむらさきに、見ゑ渡るかな。

七

○雜の歌十首　笠川慶治

浦　咲匂ふ千くさの浦に、きてみれば、きよするなみも、花と見えつゝ。

崎　吹おろす、むこ山風に、もゝ舟は、和田のみさきを、さしてゆくなり。

潟　二見潟、こぎ出てみれば、さやかゝみも、不士の高ねぞ、浪にうかべる。

泊　波の音におどろかされつ、梶枕、よすがらこひし、ふるさとのそら。

渡　いざゝらは、賤がふせやに、宿からん、こまの渡の、ゆふぐれのそら。

瀧　山姫の、さらしたりとも、見ゆるかな、そらにそびゆる、布引のたき。

岸　むらさきの、藤江の岸に、きてみれば、下ゆく水は、みどりなりけり。

沼　ゆく方は、いづくなるらん、沼水の、ふかきこゝろと、しる人のなき。

水　やつれたる、旅のかげ見ん、逢阪の、せきのし水に、立ちとまりつゝ。

嶋　これやこの、我ふるさとを出しとき、泣きてわかれし、いもが家嶋。

○述懷の長歌幷短歌　曲亭馬琴

あだし世に、あだし世わたる、あだし名の、あだにしたてば、はづかしき、心あ

さし顔の、水くきは、ちびたる筆と、すみ田川、いざこと〻はん、人しあらば、なしとこたへて、夏の夜は、ほたるあつめし、まどの外に、杖をもひかで、な〻そぢの、翁さびたる、すさみには、於曾しや似げも、あらがねの、眞金にあらぬ、あだしふみ、つ〻れさせてふ、むしよりも、はかなかりけり、あめつちの、むすびの神の、あやまちか、かくまでをこの、しれ人を、うみいだしけん、ゆゑよしを、いはまくすれど、くちなしの、花のみめで〻、山吹の、實のありとしも、得ぞしらぬ、あだし世の人、あながまや、あだしこの名を、としあまた、あだよしられし、身をいかにせん。

かくれても、なはあだなりき、みの笠の、名はあらはれし、あめのしたはも。

○佐久間象山翁の書簡

世の流行とし在れば其風俗の善と悪とを擇はず、其物の可と否とを辨ぜず、之を行ひ之を爲すは一般の通弊にして、俚謠、鞠唄、守歌等此一部分たり。近來異様の風俗をなして街衢を徘徊する飴賣等、殆と閑に堪えざる猥褻の謳歌をなして購客を歡ばしむ。余が住居せる四隣の兒女等之れが爲す業を歡べるものから、常ようち集ひ怪しき聲

九

と發し甚しきは太皷樣のものを鳴らし之を眞似び、得々然として恥る色なく放歌をなす、誠に慨歎の至りならずや。父兄たるもの宜しく茲に警誡を加へずんばあらず。十
左の書簡は佐久間象山翁曾て茲に感ずる所ありて、知友の人へ送られたる者にして、文明の母に掲載すべき價値ありと信ずれば、錄して貴社に寄せ以て未だ之を知らざるの人に示す。

濱町　松宇居士

凡そ人はをしへ方により、そだてかたに隨ひ、よき人にもあしきものにも成るとにて候。目に見、耳に聞く所、よき筋に習へば、必ずよき人となり、目に見、耳に聞く所あしきふしに習へば、必ずあしきものとなりやすく候。このゆゑにをしへの道には、胎教とて身ごもりたる時より、その母身をつゝしみ、れこなひを正しくすれば、生るゝ子その才必ずかしこく、人にすぐるゝとなり。去れば生れ出て後には、いまだものゝ心をしらずといへども、よき事とば見せて、あしき事をば見せず、よきふしをばきかせて、あしきふしをばきかせぬ樣にあり度となり。然るに近來世間の風儀あしく成りゆき、この近邊のもり子ども、向ふ寺の門前などに集るを見るに、無作法のかぎりきかれぬ事どもをいひうた

ひ、ふざけさわぎ候事夕方わけて甚しく幼年より奉公に出て、もりなどつとむる程の下賤のものといへども、習へ宜しく、身持正しくば、よきものに成り出るとあるべし。然ればならひはよく致させ度ものなり。去れど是はしばらく置き、奉公人をもめしつかふ程の人の子、奉公人の習ひあしきにかぶれ、よからぬことゝもを見おぼえきゝ覺え習ひあしく成り候はんか、甚氣遣しきことに存候。依て内々心つけ申候。近處懇意の中、子供あり、もりある方と申談ト、もりの世話少しく有之度候。某存候に、さしむききびしく禁じ申度は、無作法のはやりうたに候。是をけしてうたひ候はぬ様申付有之候はゞ、大いなる補ひにてあるべく候。只其の人のために成り候のみならず、此近邊兒女の幸ひに可有之候也。



○美人車

思案外史作

十一

其六――何時に替らぬ松の色。

女の一念は恐ろしいもの！　むかし〳〵蛇となッた例もあるとやら、それは夫の不實を憤ッた嫉妬心、これは又自分の許嫁の男に名乗り合ひたい、一目遇ッて今迄の苦心をッイからう〳〵と物語りたい一心から傳手を求めいろ〳〵苦心の末とう〳〵其夫――夫と思ひ詰めた男の家へ首尾よく這入り込んだ其心の中の不憫さ………思ひやるだにいぢらしい程。

「あのゥ　おまいの名は何とお云ひだッけね、どうも妾は記臆が惡くッて直く忘れて仕舞うのには誠に困るよ。

「妾の名でございますか、妾の名はりやうと申します。

奥樣はいと咲ましげに

「おまい今迄何處ぞへ奉公した事があるかい？

「イヽヱ此方が初めてゝございます。

「さうかい………初めてゝは少しつらいかも知れないが、そんなに骨の折れる事も無いから辛抱して少しでも長く勤めて居る樣にしておくれ。

「へィ貴女が御面倒見てお使いなさッて下さいますなら妾は何時までも此方に御奉

公致して居ります。

「ア、そりやア、大變に妾の方ても都合がいゝよ、實はネ、今迄來るものも來るものも、みんな長く居附かないんで、ほんとにだれッたかッたよ、少し家の事に馴れて、妾が留守でも殿樣よ御飯の一トつも差支なく上げられる樣に馴れて來ると、ヤレ親の病氣だ、ソレ緣者に不幸があるッて皆んな下ッて仕まうのには誠に困り切ッたよ。どうかお前もかうやッて緣あればこそ妾の所へ來たのだからそんな事の無いやうに少しでも長く居てくれよ。

云はれて仲働のおりやうも喜び顔

「ヘイ貴女の方でさへお使ひ下さいますなら、妾は一生でも此方に御奉公いたします積りでございます。

「お前がさう云ッてくれるとどんなに妾は嬉しからう。

おりやうは急に思ひ附いたのやら

「オヤ妾はお話よばかり身か入ッてまだ晩のお仕度をいたしますのをすッかり忘れて居りました。

「おあよそんなに急がなくッてもいゝよ。たッた今三時を打ッたばかりだもの、そし

て今日はアノ獨活を湯出て夫に玉子を落してお汁が出來たら夫に過頃買ッた小鯛を鹽燒にしてそれを殿樣に上げればそれていゝンだよ。

「それなら其間に鳥渡お髪を撫でつけませう。

「さうかい。

おりやうは形の如く鏡臺を奥樣の前に据えた、鏡の面に映る一双の佳人、一ッは九谷の花生に挿んだ牡丹、一ッは溪間に咲める姫百合、眺めに孰れ優り劣りはありません。

「奥樣此のお根掛の玉は何でございます？　餘程珍らしい好い品でございますネ。

「夫れかい、それはネ殿樣が御洋行なすッた時お土產に持ッて來て下さッたンだよ。

「オやそうでございますか大層光澤があッて結構なお品でございますネ。

「さう賞められたら何か驕らなければならないよ。

「オホヽヽヽ奥樣がご串戯をおッしやッてからに……(急に氣を替へて相方きッぱり)時に異な事を伺ひます樣でございますが、殿樣のお鄕國は何處でございます？

「お鄕國かい、お鄕國は長崎さ(何氣なくかう云ッた)

「長崎ッ(顏色少し替る)長崎でいらッしやいますの(言葉急はしく)長崎は何處でございます？

「妾はよくは知らないが長崎は東濱の町ださうだよ。
「それなら殿樣の御幼名は芳の助樣と申しは致しませんか。
妻君は痛く驚いた樣子で
「どうしてお前それを知ッているンだい？
「夫を妾が忘れてどういたしませう。やッぱり妾の考へ通り殿樣は妾の……
言葉は矢庭に口籠ッてそして淚の雫はおりやうの目緣を傳はッて露を結んで來ました、今は堪へ兼ねたか、はら〳〵と妻君の肩へ落ちか〻ッて來て櫛取る手も震はれて見えました
「オヤおまへ泣いて居るネ……おまへどうしてそんなに泣くの？　譯も話さないで。」
おりやうは暫く其處に打伏して泣いて居ました、妻君は又何んでおりやうが泣くのやら解らないので只不思儀さうに此方を見返ッて居ましたがこときには何か仔細がなくては……と懇に尋ねました。おりやうは此處で僅に泣を收めて
「マア奧樣　妾の申す事を一ト通りお聞き下さいませ……

これからおりやうは此家の主個駒形芳文の許嫁だと云ふ事を詳しく話し、今までいろ

〱の辛苦艱難を涙相手に物語ッて、頼みよ思ふ叔父が病死した後は叔母と相談してとう〱此家に下女奉公——賤しい水仕業をしても兼ねての初一念——此處の主個が果して許嫁だと云ふ事を慥めたいばッかりに仲働となッた一伍一什を妻君に打明けたので妻君も大に其貞操よ感じ入り、夫と又詳く夫芳文に話すと此も大に感ト入りれりやうの他愛ない心根に對しても自分が既にれ愛といふ現在妻を持ッた事を深く恥じ入ッたが今更罪もない——貞節を盡そお愛を離別してれりやうを迎へとる譯にも行かず又さうするのは却ッてれりやうの本意よ悖るとの事で相談の上、以前自分の處に書生をして居た——今は大藏省の參事官を奉職して居る吉川初に合巹の仕度萬端整へて目出度四海波を謠ッた後は叔母も其家に樂隱居の身分となり兩夫婦とも至極仲よく——古い口調だが——彌が上にも彌榮えるとの事で此美人車も滯りなく此處で輓き仕舞ます。

(大居)



○東京家禽雜誌（毎月一回廿五日發兌一册定價八錢　東京神田區南神保町家禽雜誌社發）

家禽の利する所たるや大なり、其の卵と肉とは以て人身に大なる營養を與ふべく、其の羽と毛とは以て工業上の材料に供すべく、而して其の糞は以て良好なる肥料となす可し。夫れ已に此の如し、心ある者は其の改良の方法を計らざるへからず、其れ蕃殖の手段を畫せざるべがらず。此の説一たび我が畜産社會に起るや、流行の風忽ち全國に吹き廻りたるはよけれども、此の間奸商等も顯はれ出で、此は歐生なり、其は米産なり、と洋鷄とし云へば其の種類の如何を問はず、妄りに之を買賣し奇利を博せんとするに至る。苟も此の勢に任せ置かば又何れの日か改良蕃殖の實効を見るを得ん、眞に嘆ずへきの至りなり。東京家禽雜誌は是れ等の弊風を打破せんとして出で來りたるものにして、其の記載の種目一として有益ならざるはなく、其の道の人々に必讀の好雜誌なり。吾人は其の益々隆盛を致さんことを祈る。

○扶桑之花（毎月一回十五日發兌一册定價金七錢　福島縣安積郡桑野村扶桑社發行）

本誌は中小學幷に之と同等なる學校生徒の良友となり、益友となるのみならず、其智識道徳、大和魂の博覧會たり、共進會たるのみならず、又以て學校以外妙趣ある學校と

なり、學科以外香味ある學科の講習所となさんと欲すと自白して咲き出でたるは扶桑の花なり、吾人僅かに其の一朶を觀たるのみなれば以て、輕忽に批評も下し難けれども、如何にも美くしくして、田舍の野邊に在らしむるは惜しく、都の春に咲かせまほしくぞ思はるゝ。

○明治文庫（每月二回一冊定價金八錢 東京麹町區有樂町明治文庫發）

明治文庫は記事甚だ面白き雜誌なり。（客觀的は面白からざれども）願くは至正至醇の筆舌を以て、一身一黨の爲にするの私論を排し、一部一派の爲にするの偏見を破られんことを、自ら告白せられしが如く。瑣細の事の樣なれども其の雜誌の題名は、少しく記事と相違することはなきか、何とか別に附すべき名もあるべし。

○九州之文華（一冊六錢五厘熊本市南千反畑撰水阯木如學會發行）

は其の第一號を不如學會より發行す、秋山銀次郎氏之が編輯人たり、提倘彥氏之が印刷人たり、而して九州の青年の學識を研磨するの目的なり。今や政治熱に狂奔する少年多々なるにあたり、此の雜誌の如きを見る、吾人實に九州青年の爲に喜ばざるを得ず。

○「夏木立」第二篇短評

大竹忠太郎

第一篇に美妙齋氏の端物を掲げ、評判よかりし「夏木立」の二篇發兌になりにき、此れ見そなわせ、と友人より送り來しぬ。斯は有難しと取り上げて、まづ表紙を見れば、六遍摺の美しさ！嘗て一篇の表紙を紅葉殿はぢゞむさしと申されたが、此篇はばッちいとでも申さうか？雁皮の袋を透す赤、青、紫、黄、淺黄五色の染分、或る人はビラ辰かと申したり。實に圓朝、小さんなど書いてなきこそまだしも……

（雪）隠天門―學海居士―　「過失短所なき人は愛らしからず」とはジョンソンの穿ちなりとかや。著書に於ても又然り。文章流暢、趣向斬新にして一點の隙なきは、批評せんとして讀む者には實に落膽の至りなり。余隠天門を讀むに及び、其言の僞ならぬを知れり。流石學者の御作だけ、文章は高尚閑雅にして、趣向は奇拔に寸毫も瑕瑾を容るゝの餘地なし。毎度ながら敬々服々。なれど居士に一言伺度儀あり、文中頁房を殿下〳〵として在るが、貞觀年間には斯く申せしものにや？

（花）あやしき赤繩―春亭花友―　本篇は狂訓亭主人著にありさうな話、まづ趣向を拜見する前に耳障りになる文句を四五箇所擧ぐべし。三頁（…太さう好いことよ…）と在るは純然たる東京流の言葉にして、金春藝者の言葉とは聞えず。五頁（…男は自分勝手計り云ッて居るよ…）とは甚だ惡るし。矢張（殿方は自分勝手計り仰ッしやるよ）としては如何？二十三頁此次の談話に（…今日は少し願いたい事がありますゆゑ…）は（お願い申したい）としたし。六十頁に（…夫れゆゑ貴兄（あにき）へお頼み申す…）の貴兄（あにき）とはべらんめへ社會の言葉にして、歴々の武士の言葉とは聞こいず。六十三頁（…貴女（きじよ）を尋ねた譯…）は四十二頁（…なんぢや茶ではないと云ふか「こひい」ぢやと餘り聞かん茶ぢやな…）と在るが如き、昔氣質の老人なれば矢張御内實とか、貴婦（あなた）とか直した方よかるべしと思考仕る。

さて之より趣向を拜見せんに、趣向は斬新の所もあれど、著者の猥りに想像を弄されしハ缺點なり。今更ことさら新らしく云はずとものことなれども、凡て小説を著作するには同感（シンパシー）と云ふことを主眼とせざる可らず。若し小説にして讀者の同感を引くこと得ざれば、凡作のみ、決して傑作とは云ひ難し。本篇此次の如きは人間界に在るべき者か？餘り奇に過ぎたり。（春亭は事を仕損んじる）確かり頼みます

ぞ〳〵。

(月)哀々―櫻― 僅々三十五頁の小品もの。 趣向は「斫られたる夢は眞實か否のあと」と云ふ句より轉化し來りたるものにて、白痴な夫婦―似た者夫婦―が夢を示現と妄信して、四年間も氣を揉んで居たと云ふ、實らぬ話、著者は讀者を充分泣かする筈なれど、如何に此頃涙もろくなッた讀者でも、これでは泣けず。 其上長々しき日記など脊負出し、塲塞げをせられたは大不感心なり。

さて此外は格別異存これなく、惡口叩かぬところは皆金玉の文字と思し召せ。



○各地方人種出産の時の位置

關場不二彦

此題は本來質疑欄内にて小梅村頭一産婆の問ひし者に答ふる者なり。 事足らねは諸君子の敎示を仰ぐになむ。

姙婦が何如なる位置と取りて分娩するや。 國土風俗の殊異なれば出産の方法も殊異なるは論を俟たず。 己に一邦内に於てすら一樣ならぬなり。 蓋し一家一土の習慣千歳の久しき存して廢せられず、今に之を守れる者少なからず。 殊に女子が分娩時の

習慣は然なりとす。今分娩位置を分ちて八様とし、綱目を設け、人種の名を記し、其の大略を述べんとす

第一、横臥して。

甲、地平なる脊位（臥床中或は地上）

乙、脊位（但し机卓上）にて両足を垂下し。

丙、脊位にて腰臀部を高くし、頭は下に垂れ肩を低うす。

丁、地平なる側位。

戊、地平なる腹位。

〔歐〕獨逸、佛蘭西、伊太利、英吉利、蘇格蘭、瑞典、諾威。

〔弗〕ウガンダ（蘇丹の南）、マッサワア（埃及の海港）。

〔亞〕日本、支那、印度、暹羅、緬甸、蘇門多拉、ケイザル、ルアン、及セルマタ諸嶋。

〔洋〕墺太利（土人及殖民英人）。ハワイ。

〔米〕伯拉西、アンチルレン、阿列剛地方、チエイエンチン、コマンチエン、キチワス、東アパチエン。

〔歐〕歐羅巴 〔弗〕亞弗利加 〔亞〕亞細亞 〔洋〕オセアニア 〔米〕亞米利加

第二、半臥又は後方に打憑りて坐す。

甲、「斜なる背中の倚り懸り」を備へたる臥床(枕又は翻轉したる椅子にて此の「倚り懸り」なる者を作る)

乙、地上にて……同じく「斜なる倚り懸り」を作る。

丙、榻子上にて……。傍に坐せる人の手に体をもたれ。

丁、榻子(長き椅子にて坐蒲團のつきたる)の上にて同じ椅子に坐せる人の兩股の間にて。

戊、分娩椅子の上にて。……斜なる憑り場處ある。

己、一人の膝の上に坐し、其腕にもたれ。

庚、地上にて。一人の兩股の間にて其腕にもたれッヽ。

辛、石の上にて。

〔歐〕獨逸、以太利、大不列顚、愛蘭、魯西亞、西班牙、希臘、土耳古キイペルン島。

〔弗〕埃及、亞比西尼、マッサワア、バリ、マヂ、キッヂ、モル、シューリ黒奴婦人、古カラバル。

〔亞〕パレスチナ、敍利亞、亞剌比亞、南印度、日本、支那。

〔洋〕ハワイ、アンダマーチン。

〔米〕智利、百露、ウエチヅエラ、墨西哥、カリフホルニヤ、合衆國(白人及印度土番)、カナダ

（佛蘭西殖民）

第三、坐して。

甲、臥床に。

乙、綱樣の者にて編みたる「つるしでざ」の上にて。

丙、榻子の上にて或は枕の一ツの上に。

一、自由に。

二、倚り懸りて。

三、後邊に立てる人に打り倚り。

丁、地上にて。

一、自由に。

二、一人の脊よ打ち倚りて互に手を取り。

（歐）無し

（亞弗）埃及、亞比西尼、東亞弗利加、ニヤムニヤム、古カラバル、カナリア諸島。

（亞）パレスチナ、亞刺比亞、印度、支那、アムボン、及ウリアセ嶋、セラング、セラングラオ、ゴロン、ケエイ諸嶋、アヽルー諸嶋、ルアン、及セルマタ諸嶋、ケイザル、ローマン、ダマ、

テウン、ニエア、セルア、アストラカン、嶋。

〔洋〕墺太利。

〔米〕ガウテマラ。

第四　踞坐して。

甲、自由よ、恰も糞便を利する如く。

乙、自由なれども後よ立てる人より頭を支へられ。

丙、自由なれども上より下せし綱に両手にてツかまり。

丁、自由なれども前方に坐せる人の肩に手を措き。

戊、他の人の脊に打憑り。

〔歐〕大不列巓、魯西亞。

〔弗〕東亞弗利加、カツフェルン、ワセグア。

〔亞〕亞刺比亞、彼斯、ブル、アムボン及ウリアセ諸嶋、セランググラヲ、ゴロン、アールウ嶋、タチムバル、チモルラチ諸嶋レチ、モア、ラコール、エータアル。

〔洋〕ミクロネシエン、英領ポリチーシエン。

〔米〕グアテマラ、墨西哥、印度人及メスチツ人、黒奴、合衆國内土蕃。

第五、膝まづきて、

甲、直立せる上体を以て、

一、自由に。

二、上より釣れる綱或ハ棒に両手を懸け。

三、他の女の手にもたれ。

乙、後に「それる」上体もて。

一、地平なる把持器をもち。

二、他の人の胸に打ち倚り。

丙、地平に後方にそれる上体もて。

丁、前方に傾きたる上体にて、木枕或は椅子に椅り。

戊、膝手位置。

巳、膝肘位置。

庚、膝胸位置。

〔歐〕大不列顛、以太利、西班牙、希臘、魯西亞。

〔弗〕エチオピア、アビシニア、

（亞）日本、波斯、蒙古、堪察加、アルメニア、ゲチルギア、ワッベラ、バハバル島。

（洋）新西蘭。

第六、立ちて。

（米）ニカラグア、墨哥西（印度人及メスチッツ人）、合衆國（白人、黒奴、及ビ殆ンド全土番）。

甲、直立し股を廣げ。

一、自由に。

二、他の人に支へられ。

乙、前方に屈み。

丙、後方に倚り一本を支へとし。

（歐）獨逸、以大利。

（弗）エチヲピア、ダルフール、ソマリ、ワカムバ、ホッテントッテン。

（亞）印度。

（洋）フィリッピン諸島。

（米）墨西哥（印度人及メスチッツ人）合衆國（白人、土番、

第七、釣り下りて。

甲、横木か又は樹枝に手を掛け身体を釣るし上げ。
乙、大きなる立てる人の頸に手を掛け身を釣り。
〔歐〕大不列顚、以太利、魯西亞、
〔米〕印度人、イロケーセン。
第八、浮みつゝ。
甲、仰向よ寢ね、肩に枕を入れ、臀部の下より廣き布を通じ、床の側に立てる二人は中体を浮ばせる樣よ保つ。
乙、立ちッヽ、兩腋の下に紐條を通して上に釣る、身は浮ぶ、
丙、横木を兩腋の下に通らせ、半ば釣り下りて、足尖は緇地を觸る。
〔歐〕獨逸。
〔亞〕暹羅、セラム。
〔米〕ヴェチツエラ、印度安士番黑奴。
是等の事は人類學上頗る面白き事得なり、詳細なるは Ploss, das Weib, II. Bd. と參看し玉ふべし

洒クスピア翁が五大悲曲とは？曰く、マクベス、曰く、リール王、曰く、ロメヲ及ジユリエ曰くハムレット、曰く、ヲセルロ。

○なくてよきもの　　鈍麺風流士

ゑせ男が蝋蜂の餘霞を汲みてよしなきとするもれかしけれど、

一春の日和心地よげなるに、若き男の日傘さしたる。　二寒くもなきに襟のわたりに布帛まきつけ、或は女のすなる肩懸を男のしたる。　三今は鐵の道ひらけて地の上にはもはや餘地だになしと考へて、空の中に高くこの道しかんものをと、西ッくにの夢をみる人あり、晴れの日の虹はともかくも、晴れて「なるかみ」きくはおそろし。　四さる姫君が舞踏めさるとて調度を母君にこひ玉ひけるに、母君は之を伯爵なる夫君に語らひ玉ひぬ、さなッなり、いかゞはせん、かれも年頃にはなりぬ、そがてうどを許してんやといわれたる。　五文の中に學なき人の評を插みたる、また腰折うたの枕詞よみたる。　六未だ乳臭き乙女子が五人六人うち語らひ世間に廣く披ろうして人を集め政りごとのいかなる、世の中のッき合ひはいかよとて演ぜつてふする。　七游女のたかどの

○餘興

○鈍麺風流士の噓傳　　添芳通朋

遠からん者は高輪の岸邊うつてふ荒浪の音にも聞け、近くは醉ふて眼に零度以上の近眼鏡とかけて顯微鏡下に探せ。　抑筆の命毛續くたけ、夫れたけ文明の母に孝行を盡

す所の鈍の風流士の噂傳を尋ぬるに、本是れ日本人にして、姓は倭野名は男兒なり、男兒とは女に非ざる所より名けしといへど、甚た疑はしき事なり。父は徳島十郎兵衛、母はお弓とか申し、潤筆に御報酬と、阿波禮果敢なき風流士なり。其雅號數多ありて、孰れか眞物鈍物なるや知れ難き故、世に是れを七人將門の末葉なりといへり。盤梯山の破裂に際し、雜誌上に吹出され、幼にして學を好み、常に筆を甜り頭を搔き鼻汁を垂し、長するに及び和漢蘭學を修め大に英獨する所あり。又頗る慷慨氣節ありて、力は本より山を拔かすと雖ども、生意氣は世を蔽ふ、借金吾れ汝を奈何せん、と遂に意を決して家山を去り、東都に遊び、俳偕を鬼庵先生に、義太夫を雲通路大夫に習ふ。聞説此雲通路大夫は、櫻痴居士の著したるもしや草紙に出現せし雲野通路の兄にして、美音世に高く、十錢の木戸錢にて客留せし程なりと。程なく端唄甚句を卒業して胃餓苦死となり意氣揚々としてウオトルベレーの時計をアルミの鎖にてかけ、一個九錢のゴルデン煙草を五錢のパイプに燻らし、一杯機嫌に過て高帽子を蹶飛し破損したれど、夏向きは却て結構なりと頓着なく憐むべき微髯は濮として疎林に似て、自由に煙草の畑の通行と許可し、鳥渡見れば老人の如く、承れば若過たり。浮きたる心をもたで山神を崇拜するを思へば、是れ必す情けを知るの武士なるべし。居を無何有の郷に卜し、書齋を痴堂といひ、又究痴

庵といふ、故に痴堂麴究痴死の號あり。夫婦相携へて萬花を稱するとある故、瘦紅吟人ともいへり。元來鉎廼風流とは慢用臭より取しと申せど、是皆誠ありげな嘘にて受取證は差上げ難し。士は一日釋然悟感する所ありて、黑髮はまだ剃らねども、心は佛、普く衆生を濟度せんとの發願より、廣く書籍を調べ、文明の母は、筆養怠らず。既に女房もあり此顏では悟りを開きし有難き世にも菅菰の齒氣菩薩婦人に無緣の意氣佛、其名を長く紙上に殘せしてこそ尊けれ。

○秀吉借金の言譯。　秀吉大坂城にありける時そいろに茶器に耽り、天下に名高き奇品珍器を買集めければ、其冗費夥多しくて月々の手許金は不足がちなり。　其爲め德川公を始め諸臣に借金ふへければ、眞田或日登城の折、いろ〳〵と御諫め申せど、中々聞入給はず「其諫言は無用なり、一天四海を掌握したる此秀吉、其位の事は百も承知二百も合点だ喃、眞田其方は文武に拔群なりと思ひ居しに、汝は無學者てあるな。」「コハ殿下の御意なれど其故承りたし。」「能く聞け、其方は知らぬか」「大閤は債金を顧みずと。」

○番頭の頓智。　コレ〳〵番頭其二子縞を見せて吳れ。「ヘエ〳〵是は入しやいまし、毎度御用有難ふ存します。　ヘエ是は當時流行のヘエ縞柄で。」「成程最と好い品を結城紬か南部か米澤か可成上等のを。」といふから番頭は好い客人と思ひ、店中引散して色々見せたれど、客は氣に入らぬといふから、是れ素見だなと腹の内では怒て居たが、終りに辨慶縞を見せたるに「ウ…是品に是品に限る、直段は何程じや。」「極く働きまして十二圓に致して、ヘエ。」「フム安直ナそれでは。」と五圓札を三枚出したを、番頭は帳場へ持行き、待てども釣を持て來ず客人はジレコミ體乘て「ヲイ〳〵番頭釣を如何した三圓は。」番頭落付顏にて釣はありません、「十二圓の所を十五圓やれば三圓殘るじやないか。」「アモ、貴

下、辨慶につりかねーさ申すじやありませんか。」

○漢學者。「何故こんなに晶燈のホヤが黑いのか。」「多分油の惡い故と存じます。」「成程それ其黑き油煙か。」

○御しそく。成人四人の子供をつれて散歩しける途に其友に遇ひ、種々の話の後に「是は皆貴下の御子息でありますか」と問はれ、其者無學と見へ「イヤしそく皆拙者の子にあらず、此二そくは隣家の子にて、他の二そくは拙者の子なり」と答へけるとぞ。

○考物廢止ノ由來書

本誌元來續々考物掲來リシガ、甲乙ノ論者顯レテ之ヲ駁シケル。甲論者ハ、斯ク六ツカ敷物ヲ掲ケテ、万一愛讀諸君子、腦病ヲ起シ、爲メニ學ヲ廢シ、生涯ヲ誤ル等ノ事アリテハ、本社ノ主趣ニ戻ルベシト。乙論者ハ、斯ク無益ノ物ノ爲メニ、看客各位ニ貴重ノ時間ヲ、費ヤサシムルハ、本社ノ主趣ナラザルベシト。所論、至極理アルヿニテ、本社モ、亦餘興ヲ添ユル爲トハ申セ、餘計ニ紙面ヲ埋メ、其爲メ案頭ニ堆キ、投書家諸君ノ名文ヲ、水葬致ス事アリテハ甚タ氣ノ毒ノミナラス、大ニ不本意ナル所ナリ。仍テ以後ハ之ヲ廢止シテ、洒落、滑稽、一口話等、ヲ掲出スルヿト致セリ。大方ノ君子、續々御投書アランヿヲ願フ。以ヲ戸ザヽヌ御代ニ、頤ノかけがねをもはづし、太平ノ腹皷ヲ擊チ、是ハ面白シ是ハ可笑シアハヽヽヽと笑ヒナバ、自然身体ヲ運動シ、讀ミタル文ヲモ消化シテ、文學衛生ノ道ニ叶フベシ。

三十一



○聖覽に入りし勝氏の詠歌

左の詠歌は勝安房氏が過般執行せられたる陸海軍大演習に關し、大に感ずる所ありとて作られしものなりといふ。而して吉井宮內次官の傳獻を以て、陛下乙夜の覽に供せられたるぞ光榮なる。

陸　軍

なる神の、野にも山にも、とゞろくハ、
　今たゝかひの、もなかなるらん。
敵味方、入りみだれつゝ、つるぎふり、
　ひくなすゝめと、雄たけびをして。
駒の鼻、いざひきとめて、かけたてん、
　いろめきそめし、やまかげの敵。
木の葉まく、つむじの如く、かけたてる、
　駒のひづめハ、たつにもやあらん。
勝得てハ、備みだすな、つゝとりて、
　みはたのもとに、よれやものゝふ。
やまぎしも、崩るゝばかりの、雄たけびに、

　かへりみもせぬ、みはたもりかな。
大君の、みまへなりやと、ことあげて、
　ましろぎもせぬ、ものゝふやたれ。
砂けぶり、けたてゝすゝむ、ひとくみハ、
　これやあらての、そなへなるらん。
雁のつらに、そなへをたてゝ、わりしくハ、
　こゝの芝居を、しむるなるらん。

海　軍

あやしくも、白浪たゝぬ、みなそこに、
　そなへやあらん、心してよれ。
一つらに、船うち向けて、うちよせよ、
　むかひの岡は、敵のかよひ路。
ありそ浪、船よそひして、うちよせよ、
　向ひのきしは、まもりだになし。
あまの屋の、たゝずまひこそ、つねならぬ、
　火矢うちいれよ、伏のあるやと。
雨風の、はげしきをりハ、こゝろせよ、
　夜討やあらん、おこたるなゆめ。
敵の船、まぢかくよらば、たまこめて、
　眞梶のあたり、うちもやぶらん。

○ラ　ベ　ッ　ト　女　史

我國在留の英國人ラベット女史は如何にも優にやさしき御方と見へ、兎角日本の風俗と好みし、挿花、茶の湯、彈琴などを稽古せんとし、先づ第一に本所の

有名なる遠州流挿花師木村某を聘して、日々挿花の稽古をなしたりしが、大に上達して遠からず同流の秘事口傳の敎授を受くる由。一方に於ける日本人にして自ら日本風を厭ふものあれば、一方に於ける外國人にして却て日本風を好む者あり、實に世はさまぐ\なるかな。

○難　文　字

誰よても解しがたき難文字は、是非共用ひねばならぬか、否用ひざるべからざるか、近頃之を用ふることの流行をはじめしかと思はるゝばかりに、現はれ來るぞ不可思議なる。過般發布になりたる新法典は、何人にても解すべき、否解せざるべからざるの法文なる可きよ、堂々たる學者にして尚解しがたき難文字決して尠少ならざるを見る。又這般の博覧會中最も平易の文字を用ふ可き農産館に於いて、却て康熙字典にても持出さねば解しがたき難文字あるは、亦吾人の解する能はざる所なり。之よ傍假字と附せば如何。

○餓　死　者　の　統　計

斯かる忌まはしき統計に就き、吾人は記載するを好まず、又讀者諸子に報ずるを厭ふ。然れども讀者諸子の中には、米の價もロク\/御承知なき御方もあるべければ、遂に爰に之を掲ぐるに至れり。こは淨土敎報が調査したる正確なる統計なり。

明治十七年	五十八人
仝　十八年	百二十八人
仝　十九年	一千百餘人
仝　二十年	七百八十二人
仝　廿一年	千四百〇三人
仝　廿二年	二千六百餘人

嗚呼年々夥しき增加ならずや、本年は又昨年より非常の增加を見るべきことと得て知るべし。哀しむべき哉。

○貧　民　の　狀　態

昨年來天災地妖の多かりしが爲め、今年は又昨年よりは餓死者の數を增すべきは、既に前項よ記したるが如し、今又爰に日本新聞に記載しありたる貧民の狀況の二三を錄し、讀者諸子の猛省せられんとを望む。

○小兒生菜を食ふ　小石川傳通院の裏手に畑地あり、近頃小兒の來り、蔬菜を摘み去る者多し。初めは小僧のいたづら事と思ひしも、日々止まざれは、終に其中の一人を捕へ聞き糺せしに、食物の乏しさよ菜を偸み喰ふなりとの事分かり、畑の主人も可愛相に思ひしといふ。

○一碗の蕎麥　芝區に一人の車夫あり、食を得ざること六日に及びたれば、最早や歩くことも叶はぬまでに弱りたれど、尚も辻待して居たるに、夜啼

蕎麥の來りければ、是れ幸ひと呼び止めて、一碗を喫し了り、偖て言ふやう、實は此の節米價の高きが爲めに、親子三人口を乾し食はざること數日に及び、今は迚も客がありても車を挽くことを覺束なし。さりとて食はねば餓死するのみ、濟まぬことなれども、呼び止めて蕎麥を食ひ、其勢にて車を曳き、賃錢を得て償ふべけきば、今日の處は勘辨して給はれ、と涙を流し兩手を合せて拜むにぞ、蕎麥屋も大に哀れに思ひ、さういふ事ならは代價は入らず、今一二碗喫せよ、と盛りて與へしよ、車夫は涙よ咽びつゝ、之を喫して別れ行く。　途中にて一人の客を得たれば、早速乘せて曳き出したれども、尙は痛く疲れしことなれば、脚も重く力も出でず、唯た冷汗を流すのみ。　客は怪しみ尋ぬるに、云々なりと物語りければ、車を下り紙入より五十錢を出し惠みたり。　車夫は深く其恩を謝し、今夜は久し振にて妻子に食物を買ひ與へ喜ばせん、ど疲れし足も輕く覺に、家に歸りしよ憐れや女房は小兒を殺し、自分も死なんと其の用意をなし居る最中なりしと。

○三日の絶食　芝濱に魚賣の老翁あり、此の頃の相場に買出しも骨が折れるとて、片手間に使ひ步きなどして日を送れり。　一昨廿九日の晝過ぎ急用を賴まれ、四ッ谷まで行く途中、愛宕下より車よ

乘りしに、見かけに似合はぬ足弱なり。　老人焦ちて追立てゝ、紀の國坂へ差掛りし頃、車夫は苦し氣に幾度も唾を吐ける中に、少しつゝ血の交る樣子に見えたれば、老人見認めて氣の毒に思ひ、車を停めて病氣ならは此處にて下り、賃錢は約束通り與ふべし、といへは車夫は謝して言ふやう、別に病氣とては無けれども、知らるゝ通り此頃の不景氣、米價の騰貴、　家には妻と三人の子供あり、瘦腕の稼ぎにて五口を糊することと難し。さりとて妻子にひだるき目を見せじと、自分は餘所にて喰ひたる振りして、妻子に少し計りの食物を與へ、今日で早や自分は三日間何にも食はずに居れば、斯くの仕合せなり、誠に御迷惑と掛けました、と聞いて老人も袖を濕ほし、夕飼れ酒代は復た何とかなるべしとて、財布の底と拂ひ、若干の錢を與へて立去り不圖後を見回りしに、車夫は物をも言はず合掌して居たりといふ。

○怪物の奉迎

過般皇后宮陛下播州舞子の濱へ御幸あらせたまひし時、神戸停車場へ御着、其の際奉迎の人々は、縣廳、裁判所の官吏武官及び神戸中西兩檢番の藝妓なりしと承る。　是れ虛報ならんと、吾人は信を措かざりしに、神戸又新日報の記する所を見れば、なか〳〵に虛報にはあらず。聊か之を左に拔萃せん。

〇赤十字御社員樣々の來狀。一昨日の紙上、藝妓奉迎の事に付きて昨日一葉の葉書が本社に舞込みたり。差出人は大日本赤十字社正社員奉迎婦人組とありて、其の文言の大畧は(前畧)妾等は當日市長樣の御案內により大日本赤十字社員の資格にて奉迎せしものゆゑ、離隔せらるゝ筈なし。恐れ多くも 陛下御鸞咫尺の下に奉迎を許さる、社員の徽章あるものは同列にて奉迎したるなり。妾等平日賤業を以て生活するとも、當日は赤十字社員となり、無根の事を書しては頂戴の徽章と赤十字社に對して失敬且つ名譽を損するあり。云々。偖てゑらい御權幕かな、堂々たる赤十字社員樣とありては吾々も頓首閉口仕るが、併し無根の事は書き申さぬ。現在社員が……オット徽章よ對して何にも申さぬ。

吾人も何にをも言はざるべし。(徽章に對してだか)

〇新奇なる見舞狀

と題し本社の大矢森之助に宛て病氣見舞狀の新奇なるものを前號の本欄に掲げしが、爾後讀者諸子より續々寄送せられ、本社のテーブル上に山を爲し、大矢の枕頭に堆を爲せり。今一々之を掲ぐるを得ざれば、其の中可成短くして面白きもの一二篇を左よ記す。

近頃御病氣は如何に御坐候哉、當分の內御快は覺束なくと存ト蔭ながら奉賀候。譬にも苦は樂の種と申し候。昔時高祖日蓮和尙、龍の口の御難數度の嶋流しの後は、大菩薩となり、弘法が大師號を受くるには、入唐中の憂き艱難と申す事故、先生の御病氣は可成重らせられ度、と番町のとし子樣同樣、四方の神々へ願をかけ居候。御全快の上は、御名を鉄筆將軍大菩薩とあがめ奉りても差支は決して御坐なく候。若し御全快は到底むづかしと御覺悟に候へば今の內香奠御請求は如何よ御座候や。先は右御病氣御見舞、否御祝ひ迄。万謝々々。

文明の母愛讀者なる　竹之友　拜

五月九日

大矢先生机下

非の內に海水を汲み盡くされじ。世は廣く人事多ければこそ小說家此世に成立つなり。只一の趣向、只一の事實、只一の人物、只一の主旨を土臺とし、以て一々個々別々新機軸を出だし、斬新な事、斬新なものを作れといへば、鉄筆氏足下でも逃げるであらう。足下文明の母廿三號の廣告、其れに類しはせぬか。

要するよ病氣見舞なり、僕古けれども一辞を送らん。「足下が今の境遇千載の一時なり、心を決して死して皈するか、皈して人間となり、社會につとむるか。浮世厭ふなら皈して黃泉へ行け、十万の道、面白き、樂しき、數限りなき日記出來るなるべし。妻戀ひし、名譽こひし、天爵こひし、きか。されば浮世に皈りて、文

明之母の上、僕等の目を喜ばせ。

浪華　紫季迂生

鐵筆生醒緜下

質疑

○初學の悩の女　秋の水ょ浮びてとあるは舟なり。　旅の雁雲路にまどひて玉章とみえの玉章は文字の如く列なるといふとなり。海士の栲縄はたへなわとよみ、くりかへしの枕詞なり。　から衣の歌の意は「きツヽといひ、妻し、はるぐヽ、皆衣の縁なり是は杜若を折句に置く程にかくよまではかなはざるとなり、大方の旅なるとも悲しかるべきに、いはんや古郷ょ思ふ人をきては一入かなしきぞかしとなり。　一戸ノ窓ニ納ムとは一ッ戸ある窓の中なる佛壇ょといふ意なり　又の日とは御考のとほり、立蔀はたちしとみとよむ、格子の坪とは格子の一間一間といふと。　さと際をとはさッと際々を花びらよてこまぐヽと吹を埋めて、殊更に人間がなしたる様なりとの意味。　軟障ひきなどとは絹類ょて張りし屏風(せんじやう又はせじやうともいふ)をひきまわしなんどしてといふ意。　賑々しくゆるぶきたりとは仰山な何ょか事でもある様に多勢して花を観るといふ意。　此料とは此品といふ事にて即て笠の事をこゝよてはいふなり、別ょ詳しくいはれず。

柄葉ょ染めかへてけりとは時雨の雨が降ッた爲ょ葉が染まり染まりして遂にはいくたびも雨が染め染めした代りよくち葉ょなッてしまッたといふ事なり。　ひるつかたとは眞ひるのとよて「つ」は

三十六

助字なり　待ちけりなの歌の意はマッテ居ッタ丁デアラウノ一今モ越エルガ昔モ越エタ宮地山デアル(時雨とは一体ウス暗クナッテ降ル雨ニテ今此デ降レバマタ向フヘイッテ降ルト云フ故ニ時雨ニハめぐるトイフ丁ハ縁ニナッテヲルナリ)同ジ時雨ノ來ルノヲ待ッテ井テ逢フ丁チ。

實にしくしければとは立派といふ意。　おしかもの歌の意は鴛鴦や鳧鴨が立ッ白浪ノ磯ノ方カラ海士ガ(コチヲチ)ミルメ(海松)チトッテ袖ニ入レ居ル、アヽ已レモ海ニ立チ入リテ海松ヲ取テ見タイモノダ。

○本郷の森水子　さうです、併し何故ょ「セリカ」さいふたか分かりません、學者も答ふるものはない様です。

寄書

○牡丹　大阪　琴水女史

おもふても、なほあかざりし、櫻だよ、
わするばかりの、ふかみぐさかな。

○國ょ皈る友を送りて

わすれずば、おもひおこせよ、海山も、
こゝろのうちょ、さはるものかは。

○文明の母記者へ　東京　秋香女史

一筆申上〳〵。　偖とや妾事久敷文明の母を拜讀いたし、大ょ利益を得、誠にうれしく相覺え候。　就ては世上の女共にも、遍く此の嬉しさを與へ、併せて貴社の益御盛大ならん事を願ふより、御編輯の方々へ御

忠告と申せばいとれこなれど、茲ニ一言女の愚痴申上ゟし。若し打捨て玉はず、御一讀被成下候へば、此上なき仕合ニ御座候。

文明之母は女流雜誌の中ニて最も宜敷は候へ共、妾の甚だ惜む所は社說、論說文杯の餘り六ヶ敷事ニ御坐候。乃も今時の女共は敎育の御影を以て、少しは進歩致したるに相違なけれども、之を殿御の若手方ニ比ぶれば、はるか數等の下に位すべく、隨而其の若手方ニは何でもなき文章ニても、女共に取りては甚だ解しがたきものなるを、まして老錬の御方立が御自分任せニものせられし妙文は、如何にして了解せらるべきや。たとひ漸くニして解し得る婦人あるも、乃はまとに一粒擇りにて、文明之母の社說文の如きは、世上の女子には盡くわからずと申すも、決して無理ならずと被存候。現ニ妾の友達及びゆかりの者の中にも、文明の母をよみかけし者澤山ありたれども、譯が解らぬとて止めたる者あまた有之、又こりずまニ讀み居る者もあなれど、乃は唯其の中の小說をのみ讀むニて、外の肝要な所へは目を注がず。夫故此の貴重なる雜誌も日ニ勢力を失ひ、小說のみ徒ニ流行致す樣ニ相成る事ありては、返すぐ〵もなげかはしき至りニ御座候。世上の操觚者流は女子の小說を好むを咎めたまへど、乃は御無理ニて、外ニ讀まれ得る書物なき故、自然わかり易き小說ニ歸する次第なれば、女子の罪ならずして、却て殿立の罪ならんかと被存候。若し茲に一の譯のわかり易き面白き雜誌を得れば、小說の勢力は自然消え失せ可申候。貴社の方々は女子を敎育し、女德を完くするとニ、御心厚ければ、今少しく文体を略して、簡易ニ綴り、大抵何人ニも解かるやうになされ度候。是迄の社說、彙報等の文は、實に女流の者ニとりては六ヶ敷、高等敎育を受けし者さへ、課業科を研究するより、困難と申居候。かゝる六ヶ敷文章を掲げて、女學未進の今日の、婦人に讀ましむるは、餘りと云へば無斟酌ニて、惡く云へば女子ニ不親切かと被存候。斯く六ヶ敷きが故ニ、普通の女子は讀むを好まず、讀むを好まざるが故に、其雜誌の流布する事周からず、周からざるが故ニ、折角の御骨折も、其効を奏せざるニ、至らんかと被案候。且又女子ニは女子流の文章ありて、男子の文辞と其趣を異ニし、男子の文は勁拔、活潑なれども、女子の文は優美、溫雅なるを貴しとす。是は兩性の性質上より、生じたる差異ニして、尤も斯く有る可き筈と存候。然るニ女子の手本となり、指南車となるべき雜誌ニして、佶屈敖牙の作を揭出するは、如何ニも不適當ニ候はずや。左あればとて妾は、言文一致体ニせよと申すニは無之、唯簡易と優美とニ方向を取り、之を和文体の方へ近けて、ものせられん事を願ひ侍るニなん。即ち貴社、雜誌の上ニ岩峒の、山水畫を畫くを止めて、百花爛熳の繡を、畫かれん事を切望する者ニ御坐候。

又小說は淑德、美行、善事を以て充されたる、者を御揭載ありたし、餘りに見苦しき小說ハ、よしや浮氣者の戒めとなるとても、人は其善き所を忘れ、惡き所を習ふは、世の常なれば、決して御揭出なきやう願度候。先日の「もめん綿」の如きは、誠にいまはしき小說なるを、何故御揭載被成候や。今ニ其理由を、見出す事出來不申候。

折々は古今東西の、賢女烈婦の傳記を、御掲載被下度、是も極平易なる文体にて。

和歌などは時間つぶしニて、無用のやう考居る人はあれど、甚僻事ニて、元來和歌は、人の心を高尚ニし、風流ニし、正しくするに、尤も効あるのみか、女子共ニは心得置て、益ある者なれば、是亦折々は其作り方、及び古歌の講義等、御掲載被下候へば、愛讀の女子共の幸福も、一層相

三十七

增可申候。

右は淺墓なる心より出たる者故、定めて取るに足るまじく、はぬちんかなれども、女心の一筋に、世上の同胞と、貴社の御爲を、思ふの切なる所より、身の愚かさを打忘れて、申出たる事なれば、御怒を忍ばせ、少しく御斟酌を賜り候へば、如何斗りか嬉しかるべき、唯只管御一考あらんことを願上ら〳〵し

○龜菊

柳月居士

龜菊と申すはもと白柏子なりしかど、後鳥羽上皇御寵愛のあまり、攝津の國長江倉橋の二庄を給はりしを、時の地頭これを押領せしを以て、地頭を罷し二庄を返すべし、と關東へ申させ給へしかど、鎌倉の執權北條義時綸言に從ひ奉らざりしより、上皇御いきどほりのあまり承久の亂とはなりぬ。然るに聖運ましまさで、終に年久しくも住馴れ給ひし九重の都をば跡に見て、遠き隱岐へぞ遷され給ふ。折から龜菊も御供仕りしが、播磨の國を過させ給ふ時、こゝは何國と御たづねありけるに、明石の浦と御答へ奉れば、

都をば、くらやみにして、出しかど、月は明石の、浦にきにけり。

龜菊御うばにありてとり敢ず、

月影は、さころあかしの、浦なれど、雲井の秋ぞ、なほも戀しき。

となん返し奉りける。それより茅店の月を戴き、板橋の霜を蹈み、蘆岸に松を繋ぎ、松江に帆を揚げ、あまたの日をば行路に重ねさせたまひて隱岐の國へぞ着き給ひける。陸地遙けき孤島のことゝあれば、なか〳〵に見るもの聞くもの都とは異りて、磯打つ白波、梢をはらふ潮風のほかは、絕えて音づる者とてなく、御不自由云はんかたなかりき。か

三十八

ゝる折には久しく聖露に浴せし人々も、見捨奉る者さへれほきに、いやしき身にしあれど龜菊は、露ばかりも愛きに心を變へず、傍に身ををしまずして御他界ましますまで、片時も御側をさらで仕へ奉りしとは、げに賞すべきものにこそ。

○錢掛松の話

志摩英虞　志紀主計

小式部の內侍は橘道貞の女なり。いまだ幼かりしとき禁中にて歌合ありけるに、其の作者に備りたり。母へすなはち和泉式部とて、世に名高き歌よみなりければ、人皆小式部の歌は母の直したるものとのみ疑ひ(和泉式部の教育の行届きたるを知らずして疑ふ)居けるに、其頃和泉式部は後の夫丹後の守保昌に從ひて、彼國に下りてありけるが、中納言定頼卿小式部の局の前にて、戯れに丹後へ遣はされたる使は皈りたりや、と言ひたるに小式部簾より半は出でゝ、定頼卿の直衣の袖を扣えて、

大江山、いくの、道の遠ければ、まだふみも見ず天のはしたて。

と詠みければ、定頼卿返歌もせずして袖を引き放ちて逃れたりといふ。

小式部嘗て母に從ひて伊勢大神宮に詣せんとす。江州を經て伊勢の界に入り、一日登夜久野に達す、道遠くして步に難む。(餘り遠きにあらざれども、常に戶外に出てしことなき母子なれば遠き樣に認めらる。)農婦の鍬を携へて來るに會す。依りて問ふて曰く、この地神宮を隔つる幾何里ぞ。答へて曰く、妾いまだ神宮に詣せしことなし。只聞く拾日拾夜にして始めて達すと。(當時人力車は勿論、馬も馬車も定宿もなく、又女輿もなき故、徹夜兼行の姿)小式部以て母に告す。母聽て之を病む。すなはち祭錢を老松に下にかけ、遙拜懇到なり。後

世この松を稱してぜにかけ松といふ。彼の伊勢音頭にも、

伊勢の登夜久野せにかけ松は、今は枯木で糀かける。

とあり。和泉式部は墓なくも、登夜久野の露と諸共に、永く此地の鬼となりしといふ。

附登夜久野は同國奄藝郡高野尾村にありて、廣大なる原野なり。京地より神宮へ到るもの、注意して之を過ぐれば一の小堂宇を得ん。古の松は枯れて跡なく、今時存するは後世の植松なれども、亦二三百年を經しものなり。又堂中に小額を掲げて、平假名字にてその由來を掲げあり。

○秋廼夜の漫筆を讀みて鈍廼風流君に一言を呈す

東京　伊東　基

人各好ム所アリ、好キコソ物ノ上手ナレトノ言ノ如ク、長所必ス此ニアリ、隨ツテ此ニ傾向ヲ生スルハ、自然ノ情勢免レザル所ニシテ、所謂先入主トナルモノナリ。然レ𪜈其病所モ亦此ニ原スルナシトイフベカラス。足下俊邁ニシテ不群、韻語ニ巧ニシテ詞藻美ナリ、學ハ十子ニ渉ッ蘐フ〆索アリ、英獨ノ二學ニ於テハ造詣頗ブル深ク、又和學ヲ修メテ該博ナリ。故ニ其文ハ古朴ニシテ雅健、字句ハ縹緲ニシテ情致纏綿ナリ。時ニ激ツテハ百錬ノ鉄トナリ、意氣人ヲ襲ヘトモ、或ハ散シテ萬朶ノ櫻トナリ、光彩絢爛人ヲシテ白雲ノ中ニ彷徨セシム。余ガ同學ノ友少カラスト雖𪜈、博學治聞ハ余獨リ足下ヲ推ス。抑學ハ一方ニ僻セザルヲ貴ブベシ、然レ𪜈其中必ス好ム所ニ傾向ヲ生ジテ、長所此ニ顯ルヽナリ。余熟足下ノ文ヲ味フニ、大旨詩想ヨリ結搆ス、字句モ亦然ラザルハナシ。而〆筆勢ハ圓熟シテ精粹、其意ハ高尚ニシテ暢達、粗笨輕滑ノ病ナク、浩々汨々能ク其言ハント欲スル所ヲ盡スニ至リテハ、余常ニ敬伏スル所ナリ。人皆曰ク是レ則チ足下ノ長所ナラント、余モ亦之ヲ疑ハス。然レ𪜈卓々タル餘裕ヲ示サントシテ、務メテ和語ヲ濫用シ、流調圓滑ヲ裝ハントスルニ至リテハ、是レ蓋シ千慮ノ一失、余ノ頗ル歎惜スル所ナリ。人或ハ之ヲ評シテ、夜叉其面ニ鉛華紅粉ヲ施シテ、落花ノ中ニ蹁跹スト。其故ヲ問ヘバ曰ク漢語和語トノ配合其宜シキヲ得ス、其文變シテ難澁崎嶇トナリ、快少ナク壯足ラザレバナリト、是レ甚タ足下ヲ識ラザルノ酷評ニシテ、足下ノ文豈夫レ然ランヤ、然レ𪜈實体ナクシテ其影アラザルノ理ヲ知ラバ、足下宜シク省ル所ナカルベカラス。唯鐵籠將軍ノ拮屈厭フベシ、是レ吾兄ノ得意ニ非ストノ一評ハ、頗ル妥當ニシテ實ニ頂門ノ一針タリ。嗚呼足下ハ鐵幹霜ニ傲ルノ梅ハ、以テ鶯兒ヲ招グニ足ラストスルカ、亭々トシテ天ニ參リ、鬱蒼トシテ其影暗キノ老松ハ、以テ丹頂ヲ宿スルニ足ラストスルカ。何ヲ困ンテ其根據ヲ棄テ、徑路ニ走ルヤ。和語ヲ用ユルノ文ハ必スシモ優美温雅ニハ非ラザルナリ、八陣ノ法、背水ノ陣ヲ用ユルノ人ハ、必スシモ勝利ヲ得ルニ非ザルナリ、鹿ヲ逐フノ獵夫山ヲ見ス。足下和語ヲ濫用スルノ弊ハ、却テ足下思ヒヲ焦シ、慮ヲ苦ムルノ文ヲシテ、冷評ヲ受ケシムルナリ。足下文明ノ母二十二號ノ漫筆中ニ殊更ニ書シテ曰ク、プラタスノアル間ハシーザル死ナ子バナラズト、嗚呼足下猥リニ和語ヲ用ユルノ間ハ冷評ヲ受ケ子バナラヌゾ。足下或ハ之ヲ甘スルモ余輩ハ之ヲ忍フ能ハサルナリ。併セテ其長所ヲモ失フヲ深ク歎惜スルノ餘リ、遂ニ此一篇ヲ草セシナリ。足下又材料ヲ西洋ヨリ輸入シテ、巧ニ之ヲ販賣セリ、余ハ之レヲ異トスルニ非ラス、人々ハ唯文字ヲ貫シ、輕々看過スルノミ、時ニ或ハ冷々然タリ。男子旣ニ斯ノ如シ、况

ンヤ婦人ニ於テヲヤ。　足下或ハ言ハン、余ハ婦人ノ愛ヲ買ハントシテ精緻ヲ極ムルニ非ラスト、誠ニ然リ、足下ハ方正屈枉、婦人ノ意ヲ迎フルノ人ニアラス。　然レ𪜈雜誌ノ題名ハ既ニ文明ノ母タリ、其主趣ハ文明ノ母ヲ養成スルニアレバ、可及的誰人ニモ解シ易キ材料ヲ撰擇シテ、足下得意ノ健筆ヲ揮ヒテハ益可ナリ佳ナリ。

第二十二號シユルレル氏ノ一段、第二十三號ゲユテイ氏ノ一段、此等ハ余ノ敬伏スル所ナレトモ、少々例ノ僻ヒ子クリタルヤウ見受ケタリ。　足下ハ人情ヲ活寫スルニ巧ニシテ紅葉君ニ似タル所アリ、而シテ甘ツタルキ僻ハ美妙君ノ如シ。

第二十三號愛國餘譚ノ如キハ實ニ雅ナリ、然レ𪜈世人ハ事實ヲ知ラス、（余モ之ヲ知ラス）又全文ヲ見ザル故之ニ對シテ冷淡ナルハ是非モナシ。　山陽ノ日本外史、清正ノ熊本城、必ス後日ニ至リ宿志ヲ遂センカ。

讀者庵主人トハ足下ナラスヤ、余ハ唯其文ノ似タルヲ以テ斯クイフノミ、果シテ足下ナラスハ謝罪セン。　松下禪尼ノ第一行ハ歴史的漢文ニシテ、第二行ハ尤モ可笑シ、是レ蓋シ活版ノ誤植ナラン、其他ハ例ノ通リ。

嵯峨橘皇后ノ第一行ハ敬禮ノ文字足ラヌ心地スルナリ。

第二十四號不時ノ再會ノ一篇ハ、少シモ感伏致サゞルナリ、却テ鐵筆將軍ノ簡潔明晰ナル好評ニテ、人始メテ事實ヲ了解スルヲ得ルトイヘリ。　夫レ或ハ然ラン。　余强テ鐵筆將軍ヲ揚ゲ、枉ゲテ足下ヲ抑ユルモノニ非ザルナリ。　余聞ク白樂天ノ詩ヲ賦スルヤ、之ヲ誦シテ老嫗ニ聞カシメ、解セザル間ハ之ヲ改ムト、足下學ニ於テ、才ニ於テ、情ニ於テ、實ニ文明ノ母ノ白樂天タリ、而シ其他ハ白樂天タル能ハザルカ、足下白樂天タルヲ欲セザルモ、余ハ此一點ニ於テ白樂天タルヲ希フナリ。余ハ昆山ノ美玉其價ノ高キヲ惡ンテ、務メテ垢ヲ爬リ、其瑕ヲ索ムルモノニ非ラス、余素ト淺學ノ一書生、或ハ足下ノ文意ヲ解スル能ハザルヨリ、喋々縷々斯ク述ブルモ、之ガ爲メ足下ノ學ト文トハ其價ヲ減殺スルニハ非ラザルナリ。　跖ノ犬堯ニ吠ユルモ、堯ノ聖人ナラザル故ニ非ラザルナリ。　足下若シ余ノ言ヲ容レ、材料ノ撰擇ニ意ヲ用ヒ、以テ足下ノ長所ヲ皷シテ進マバ、玉價益騰リ、聖人益聖ナラン。　看容モ亦快ト叫ビ雜誌モ亦萬丈ノ光焔ヲ吐カンコト疑フベカラズ。



法理精華

第三十四號五月十五日發兌

毎月一日十五日二回發行　一册金十錢十册前金九十錢

論説
日本法學ノ退歩ヲ豫防スヘシ　法學士　山田喜之助
復代理人ニ於ケル日本民法及商法　法學士　松野貞一郎
裁判所構成法批評（第三回）　法學士　花井卓藏
契約ハ對世權ヲ生ス　法學士　岡野敬次郎

飜譯
審問秘訣接（第三十一號）

擬律
民事第三十八號問題　法學士　高橋捨六
刑事第三十六號問題　法學士大谷木備一郎
刑事第三十七號問題　法學士　澁谷慥爾
刑事第三十八號問題　花井卓藏
國際第二號問題　法學士　藤田隆三郎
民事第廿六號答案　芥川順治

判決例
玄米賣買約定履行上告件　バリストル　法學士　増島六一郎

文苑
地獄裁判夢中筆記（第十六回）　若葉家主人
老吏の寢言　塵中散士
雜斅店奴隷法　放言居士
四十七士處刑評　法界堂主人
東京法學院講師雜詠（一）　中村一

雜錄
日英人婚姻の効力○新訴訟法の大主義○商號○東京法學院れ奮發○法典と貧乏人

發行所　東京神田區錦町二丁目二番地　法理精華社



上製定價金四十五錢
並製定價金四十錢
全國無遞送料

文明の母合本第三目次

雜錄

文明之母第十三號附錄目次

文明之母第十六號附錄目次

樞密院議長從二位勳一等伯爵大木喬任公題字
法制局參事官兼法律取調報告委員正六位本尾敬三郎先生叙
日本法律學士佛國法律學士司法省參事官兼法律取調報告委員從六位岸本辰雄先生叙
日本法律學士臨時帝國議會事務局書記官正七位矢代操先生叙

日本商法實用

全二冊

正價金九十錢

明治法律學校々友
淺間新五郎君
小野崎吾助君 合著

本書ハ専ラ商人間ノ實用ヲ趣旨トシ務メテ平易ノ文字ヲ用ヒ簡明ニ其意義ヲ説キ商人間ニ尤モ必要ナル商號ノ登記及ビ商人ノ義務トシテ所持スヘキ帳簿ノ種類幷ニ其義務トシテ記入スヘキ事柄及記入ニ關スル注意等ヲ一々列記シタルノミナラス會社法及爲替法、仲買人規則等ヲモ明瞭ニ解釋シタルモノナレハ商業家ノ為メニハ行路ノ指南商海ノ標識トモ稱スヘキモノニシテ紳商諸君ハ勿論手代小僧ニ至ル迄通讀セサルヘカラサル要書ナリ乞フ諸君速カニ購讀シテ明年實施ノ準備ヲ怠ル勿レ

本書ハ六月初旬發賣仕候

明治廿三年五月

發行所
東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地 文昌堂 長島恭三郎
埼玉縣北足立郡鴻巣町百十四番地 盛化堂 長島爲一郎

文明之母第十六號廣告

文明之母第十六號は本年第一月より發行したるものにして新年を祝せんが爲に本誌大の附錄一冊を添へたり而して其附錄の表紙は名匠の奇想に成りたるものにして米國の石版印刷社會を驚かしたる者也今や此の最も面白き最も有益なる最も廉價なる十六號は賣切れなんとす望の者は定價六錢に郵稅二錢を添へて至急申込あれ

目次＝社說○嗚呼二十三年の春は來れり◉論說○女子手藝論（中川重麗）◉家政○結婚の栞（奇玉散人）◉文藝○新年今樣（肉筆三遍摺）佐々木弘綱○樵歌入山（黑田清綱）寒松（內山義熈）○閑居水聲（本居豐頴）○松上雪（町原熈晳）○秋夜漫筆（鈍廼風流士著鉄筆將軍評）○竹取講義（琴條女史）◉小說○美人車（思案外史）◉批評○條約改正（鉄筆將軍）○殘菊（仝）○近刊雜書◉雜錄○妻妾の稱呼（山下重民）○アーノルドの日本に對する賛評○日本昔時の婦人○末廣重恭著鴻雪錄の發賣を禁ずべし○其他餘興彙報寄書等各數件●●●●附錄目次○筆はじめ（紅葉山人）○雪中松柏愈青々（內田遠湖）○かゞみ餅（漣山人）○妙七情（露伴子）○三十日の月（鉄筆將軍）揷畫美麗なる者五

生文社

◉尋常中師範學校及高等小學校用書類發兌廣告

◉算術理論的問答 全（近刻）
◉受驗必携 地文學問答 全（三版）
◉受驗豫備 日本歷史問答 全（再版）
◉受驗豫備 萬國歷史問答 全（再版）
◉動物植物礦物 博物學問答 全（再版）
◉日本萬國支那 歷史疑問答案 全
◉日本外國 地理學問答 全（再版）
◉受驗豫備 支那歷史問答 全（近刻）
◉受驗必携 理化學問答 全（四版）
◉算術問題解釋法 全（近刻）

◉右諸問答書ハ尋常中學同師範學校及高等小學校等ノ諸教科書中ヨリ各必要ナル問題數百ヲ摘要精撰シテ之ニ答案ヲ附シ主トシテ學生及受驗者記臆上ノ便ヲ謀リ又其末尾ニハ讀者參考ノ爲メ諸官立學校ヘノ入學試驗問題ヲ附記セリ◉算術及代數問題解釋法ハ共ニ四則ノ雜問ヨリ逐次例題ヲ擧ゲテ之ガ解釋ノ方法ヲ示シ算術ハ開方級數○代數ハ二次方程式ノ末尾迄ヲ記載ス◉規則集ハ東京現在著名ナル官私男女諸學校ノ位置月謝教授書目及其他ノ學則入學ノ手續等ヲ記載ス◉用器畫法ハ問題凡ソ一百ヲ撰ミテ之ニ精解ヲ加ヘタリ◉代價ハ各書共金五錢郵稅五厘◉爲替振込ハ本鄉郵便局郵券代用ハ一割增◉大賣捌望ミノ諸君ニハ特約ヲ結ブ

發兌所 東京本鄉元富士町二番地書肆 盛春堂

○矢野文雄龍溪先生閲　○井上寛一君
○枝元長辰君　○村井寛君　同編

○洋裝全一冊○總クロース金文字入美製本○紙數五百頁余○定價金九十錢○特別金六十五錢○郵税金十錢

廿三年版

内外 百事便覽

報知社藏版

近來世人の便益に供する書籍陸續輩出すれども其中最も多く實用に供せられて江湖の喝采を増せし者は此百事便覽に如くものなかるへし、此書は西洋のアルマナック、又はカレンダーに倣ひ毎年歳首に刊行する者にて上は諸法令諸規則より内外各國の統計類を初めとし、海陸船車の賃金里程、朝野仲士の姓名宿所、全國の新聞雑誌、諸税の税率等より下は日常の雑文に至るまで社會萬般の事實を掲載して細大一も漏す事無し、其外に現時最も世人の注意すべき各國の議員撰擧法を載せ又和漢洋と對照せし年代記をも附したれば如何なる事とも一目の下に知り得べく、諸種の事實を一時に調査し得べく、家に備あるも旅中に携帯するも其利其便實に言ふべからざる者なり、左れば昨年の春始めて第一版と刊行せし時は大に世人の賞賛を博し諸大家より我邦のアルマナックとの褒辭を蒙むれり然れども當時は何分手初めの事なれば材料の蒐集等に非常の困難を極め編纂の手都合意の如くならずして書中誤脱の件も尠なからざりしが本年は早くより其準備に取掛り充分綿密に調査を盡したる故本年新刊の分は昨年の分に比して記載の項目に非常の増加あり又在來の記事を訂正増補せし廉々最も多し、江湖の諸君一本を得て多年の不便を免るべし

出版發賣所　東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地　長嶋恭三郎

賴山陽先生原撰
原田由巳先生訓點

訓點謝選拾遺　全三冊

○中學校○師範學校○教科用書

該書ハ文部省御檢定濟ニ相成候ニ付此段廣告仕候

東京日本橋區大傳馬町二丁目　長嶋恭三郎
埼玉縣北足立郡鴻巣町　長嶋爲一郎

牧野吉彌編者　埼玉浦和　文華堂出版　紙數三百七十頁

教育科試驗問題答案

全壹冊
特別廉價金四十錢
全國郵税金四錢

本書は專ら小學に從事する諸賢教育科の受驗用に洪する爲め著はせし者なり因て教育學授業法管理法中東西諸大家の著書及論説に就き其要を取り加ふるに著者が多年經驗を以て最も必要の問題を撰み務めて簡單明瞭なる文章を以て答案を附せし者なれは一讀して其理の全きを得るふ購讀あらん事を

東京日本橋區大傳馬町二丁目

大販賣所　文昌堂　長嶋恭三郎

◎各府縣書肆へも賣捌き依托す



●定價一冊金四錢
●十冊前金三十八錢
●廿冊前金七十二錢
●府外郵税一冊に付五厘
●廣告料一行金八錢
●本誌は前金よ非ざれば送本せず
●郵便爲替は本郷郵便局
●郵劵代用は必ず五厘切手よて一割増し

◎第壹號五月十五日發兌（毎月二回五の日）

○本誌は女子敎育を上進し婦徳を養成する處の雜誌なり委しくは此本誌を見て知らるべし

○本誌には左の諸氏專門盡力執筆せらるべし（姓名イロハ順）

石橋忍月　尾崎紅葉　大橋素六郎　神田貢介　田口茂十郎　鍋島珪章
幸田露伴　淡島寒月　久松定弘　森鷗外

○本誌を賛成し并に特別奇書家たることを承認せられたる諸氏左の如し

伊澤修二君　嚴谷漣君　岩男仲君　大河内正質君　落合直文君　渡邊國武君
加藤弘之君　川上眉山君　中村正直君　中嶋幹事君　内田不知庵君　長嶋寅次郎君
跡見花溪君　下田歌子君　廣津柳浪君　元田直君

發行所　本郷區春木町一丁目十九番地　閨秀社

●張馳館少年叢書發兌

理科春秋

春之部壹册

●定價貳拾五錢○運送賃金四錢
○彩色石版畵及密畵入美本

右本月末印刷出來來月十日より發賣致候に付豫約御申込の諸君は右日限迄に左の金額御郵送被下度金子到着の順序を以て發送致し候也

●豫約特別減價　金二拾錢
（但し郵券代用は一割増し）別に運送賃金四錢

大賣捌店　東京新聞會社○良明堂○東海堂○信文堂○巖々堂○神田小川町尚友社○京都寺町三條杉本[illegible]協○大阪[illegible]町[illegible]書肆

霞城山人譯

學校家庭 遊戲全書　全

定價金壹圓
改正減價金八十五錢
（無遞送料）

本書は獨逸ワクチル氏の新遊戲書を飜譯したる者にて、走戲、跳戲、嚎戲、毬戲、丸戲、拋戲、體操戲、游泳戲、棋戲、影戲、風戲、重學戲、理學戲、滑稽戲、妖術戲等の部門を別ち、二百八十種の遊戲を撰み、畵圖を插むこと一百二十、實に本邦未曾有の遊戲書なり、されは中小學校の參考として一日も缺く可からざるは勿論家庭の重寶として育兒に心を用ひ給ふ世の父母が若し此書に據りて各種の新遊戲を與へられなば、花の朝、月の夕、夏の日と、冬の夜とを問はず愛兒の啞々の笑聲を買ふへく、炯々の眼光を見るへく、以て感情の美を發ひ、以て智識の眞を養ひ、又身體の健全氣象の活潑を養ふへく、殊に少年諸子が目下新年の夜話會各處の運動會に之れを携へ來りなは新遊戲の材料は殆と無盡藏と一般にて、快樂の泉源は蓋し汲み盡し難からん又此書は金字クロース製の美本なれば諸學校の賞品として生徒に與ふるに適し又手土産の贈物として小兒に與へなば他の品を贈るに優ること遠し幸に一本を購ひ給はんことを、謹白、

右定價御送付次第本館より直に御送申上候也

明治廿三年一月　坂本改　長也宮

民法及商法釋義發刊ノ趣旨并豫約方法

大審院檢事
法律取調報告委員
明治法律學校
東京專門學校講師
日本法律學校
日本法律學士
佛蘭西法律學士
從五位　磯部四郎先生著

大日本新典　民法釋義

全十六冊

本書ハ廿三年五月廿三日第壹號發兌
ハ毎月（十日・廿三日）二回必ス刊行
ハ八ケ月間則チ十二月廿三日完成
ハ紙質ノ善良ナルヲ撰ヒ且印刷ヲ鮮明ニシ誤謬ナキヲ旨トス

全部紙數大凡三千四百頁
壹冊紙數二百廿頁餘
毎編正價金四拾錢外ニ遞送料金四錢
全部拾六冊金五圓八十錢

豫約法

○豫約價壹冊金三拾五錢
○全四冊前金壹圓三拾六錢（八冊前金貳圓六拾錢）（十六冊前金五圓）
○右ノ外壹冊ニ付遞送費金四錢ヲ要ス
○全卷十冊以上前金御注文ニ候ハヾ遞送費ハ弊舗ニ於テ支辨スヘシ
○豫約申込ノ際必ス送金アルヘシ
○郵便爲換ニテ御送金ノ節ハ必ス証書ニ（東京本局）又ハ（武藏鴻巣）ト記入アルヘシ
○郵券代用壹増ノヿ

○豫約期限ハ來ル十一月廿日迄トス　但シ期限後ハ必ス正價ニ復スヘシ

民法トハ各人相互ノ權利義務ヲ規定シタルモノナリ故ニ此交渉頻繁ナル社會ニ安息セントスル者ハ少ナクモ其大体ニ通セスシテ可ナランヤ蓋シ該新典タル我國古來ノ慣習及ヒ歐洲諸國法中ノ粋ヲ拔キ別ニ一体ヲ成セル者ニシテ四編合計正文凡壹千三百十九條アリ

仝先生著

大日本新典 商法釋義

全十册

○廿三年五月十五日第一號發刊
○毎月(十五日)(廿八日)二回刊行シ九月廿八日完成
○全部(十卷)紙數大凡二千七百頁(一册二百七十頁餘)
○正價一册金五十錢外ニ遞送費一册ニ付金六錢
○全部(拾册)金四圓五十錢外ニ遞送費金六十錢

豫約廉價

壹册前金四拾五錢(五册分前金貳圓拾五錢)(十册分前金四圓)右ノ外遞送費一册ニ付金六錢ツヽヲ要ス
全卷十册以上前金御注文ニ候ハヽ遞送費ハ弊舖自辨ノヿ
豫約期限八月廿日迄(以下民法ノ例ニ倣フ)

商事ハ民事ノ一部ニ外ナラス然シテ商事ニ在リテハ特ニ迅速信實安全ヲ貴フ是レ民法アルニ拘ラス更ニ商法特別ノ規定ヲ要スル所以ナリトス我國固ヨリ商事ノ慣例略々備ラサルニアラスト雖モ只其不規則タルヲ免レス故ニ此新法ノ公布ハ商業社會ノ秩序ヲ一新スルモノト謂フヘシ正文凡壹千零六十四條アリ

右二大法典タル實ニ汎ク法律學ニ達スル者ニアラサルヨリハ其意義ヲ表白スルヿ能ハサルナリ弊堂是ニ見ルアリ切ニ磯部四郎先生ニ乞ヒ詳細之カ註釋ヲ施シ適宜册ヲ分チテ漸次刊行セントス[illegible]々先生ハ明治八年官命ニ依リ佛國巴里府ニ遊ヒ留學六年歸朝以來專ラ法典編纂ノ事務ニ鞅掌セラレシモ公退ノ暇著書頗ル多ク其學識ノ深遠文章ノ緻密世夙ニ定評ノアルアリ且民法商法ノ蘊奥ヲ討究セラレシヿ人ノ能ク識ル所ナレハ此書ノ善良ナル多言ヲ竢タスシテ明カナリ又世間普通ノ註釋或ハ名家貴顯ノ題字序文等ヲ掲ケシ投機者ノ一夜作ニ成リタルモノヽ比ニアラス江湖ノ人士先ツ第一卷ヲ得テ此廣告ノ誣言ニ非サルヲ知リ賜ハンヿヲ希望ス

◎兩書ハ遞信省認可ナルヲ以テ遞送費ノ廉且ツ極メテ迅速ニ到達スヘシ

(遞信省認可)

發行所
東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地 文昌堂 長嶋恭三郎
埼玉縣北足立郡鴻巣町百十四番地 盛化堂 長嶋爲一郎

明治二十三年五月十八日印刷出版

(東京神田區柳原河岸銘若堂印刷)